

## 62 平野重誠の『玉の卯槌』（一八三七） にみる凶年後の心得と看護

中村節子・平尾真智子

1) 看護史研究会

2) 東京慈恵会医科大学医学部看護学科

『玉の卯槌』は平野重誠（一七九〇～一八六七）が一八三七（天保八）年に書いた養生法で、二巻（第一巻三十八頁・第二巻二十六頁）からなる縦十九センチ、横十三センチの和綴本である。彼の著作は安西安周により、五種に分類されているが、本書は『病家須知』（一八三三）『養生訣』（一八三五）と同じく「通俗的医事衛生」に位置づけられるもので、内容的にもこれらの先行書との関連がみられる。『卯槌』とは疫病災禍よけのお守りのことである。

第一巻には、凶年後の養生の仕方、伝染病を予防する法、病気になったときの看護法、傷寒時疫に効果のある水療法、はやり病の種類など、第二巻には、片田

舎などで医者に乏しいところで、手近に得られる薬方を、素人が出来る方法で詳細に述べ、更に簡斎画の『薬物写真図』二十三種類を附録として載せている。

まず、第一巻の最初に気候は人間の体にも影響すること。特に凶年の後には、疫病（伝染病）が起るが、それは心の油断から起ること。しかし養生を守り、行い正しい人は病気にもかからないと述べている。つぎに、看病・看護について「人の体には不思議なはたらきのあるものにて、おのれと病を徐去んとする機関がありて、邪気に侵る、ときは、腠理をひきたてて粟肌になりて、寒気を起し、熱を催して追払んとし、または腹の病が上にあれば嘔逆をもよほし、中にあれば腹をいたため、下にあれば下痢をもよほし、あるひは鼻の清涕嚏を出し、喉頭の咳嗽をおこし小便に塗るるなど、みなこれ自然の力を以て病を去らんとするものなり」「この自然の働きが負けそうなときに、鍼灸薬の類にて加勢のかけひきをするが、医者役目なり」「ゆえに今理に背たる療治をせんより、ただ看病に心をつくし、病を自然に任て守居れば、元氣おのれと運動

して病を駆出す道をひらくこといつもあるなり」と述べ、人体の自然治癒力と看護との関係を言明している。さらに伝染病のときの看護の大切さについて「一切の病人に的当の薬は用いても、看病のよきとあしきにて、おほひなる相違あるものなり、世間の諺にも医者三分看病七分といふは道理至極なり、とりわけ傷寒時疫はとりあつかひ次第にて、看病あしければ、愈べきものも死をいたすことあり」と衣服や寝具の清潔、病室の採光、照明や換気、身体の清潔、起居動作の介助、排泄時の介助、食事の与え方、薬の与え方、病にかかった時の初期の手当ての大切さ、占いやみくじに頼らず良医を選ぶこと、伝染病になったときの家族のかかわりなど、二十項目について詳細に看護法を述べている。

更に、重誠自身が発明した水療法で「傷寒時疫」を治癒したこと、伝染を予防できることや傷寒時疫に水療法を用いてよい証についても詳細に説いている。

『玉の卵榎』が書かれた一八三七年前後は、「天保の大飢饉」の中でも大凶作が続いた年であった。江戸以

外の地方や農村では、飢饉のために飢え死にするものが多く、あちこちで、百姓一揆が勃発している。特に一八三七年二月には大阪で「大塩平八郎の乱」が起きている。『玉の卵榎』の序文に「去冬の中より世間に傷寒時疫の病者多く」とあるように、とくに「傷寒時疫」が流行ったようである。

凶作・飢饉といった庶民にとって危機的な世相の中で、重誠の医師としての人間愛（重誠は持前の世話やき心といっている）が、養生・看護を主体とした書著さずにはいられなかったことが伺える。

また、『玉の卵榎』は現今の世界的異常気象が続くなか、現代人が謙虚に学ばなければならない健康と看護の心得について示唆を与えている。